みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

総括①

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 欣雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009553

河合洋尚・張維安編『客家族群與全球現象』
国立民族学博物館調査報告　150:383-392(2020)

総括①

渡邊欣雄

わたしとしては初めての巨大な国際シンポジウムで、しかも「客家」の人々がメインテーマ。これだけ報告発表ができるとは、想像ができなかったということです。

わたしは客家研究だけでなく、その他の研究に関する自己紹介をしたいんですが、じつは移民研究をこの10年やってきております。どういう研究かと言いますと、「客家人」に限らないですが、まずは「アフリカのカメルーンにおける中国人移民の研究」です。カメルーンに移住した中国人の研究です。最近非常に中国人がアフリカ各地で大活躍しておりまして、いろんな華僑・華人の街をつくって中華街ができておりますけれども、そういう研究をしていました。それから「中国大陸における日本人研究」をしたことがあります。こういう研究は、日本ではあまりないんですね。中国において日本人がどういう生活をしているのか、「和僑」っていう日本に帰らないで中国で生計を立てている人がたくさんいるわけです。だいたい日本人は中国国内に50万人くらいいるんです。もちろん台湾にもたくさんいて、そういう海外の日本人研究をやるべきでしょう。海外の日本人の研究は、いや最近京都大学に若手の研究者が研究していることを、松田素二京都大学教授から聞きましたが。

それから「沖縄における中国人移民の研究」も致しました。このような研究をわたしはまだやっています。もちろん報告も書いていてまだ継続中ですが、戦前から台湾の人が沖縄に移住しており、とくに台湾文化の沖縄への影響は大きい。今度は「台湾における日本人移民の研究」をすることにより、台湾に返礼をしてみたいと思っています。

それといまいちばん研究継続したいと思っているのが、「ブラジルにおける沖縄人移民の研究」なんです。こういう研究も、現在やっているわけです。わたしは結局、アフリカからブラジルまで、移民研究やってきているということですね。ブラジルにおける沖縄人研究というのは、実は日本においてはかなり蓄積があるわけです。今日の客家の全世界的な移民研究と関連付けて、ちょっとみなさんに「移民研究に必要な視点」ということで問いかけてみたいんです。例えばわたしはブラジルの現地の人に、次のような質問をしたわけですよ。

沖縄出身のブラジル人、つまりブラジル国籍を持っている沖縄出身の人に対して、かれらのアイデンティティについて質問したわけです。まさに今日の発表のなかで重要な問題の一つが、「客家（人）とは何か」ということを同定することです。すなわち海外における客家人のかれらの自意識を知るために、「自分が客家人であるかどうか」ということを直接聞いてみることは非常に重要です。河合洋尚さんが言ったとおり、われわれも「この人が客

家人であるかどうかということを認定する必要性」があるときには多分、その同定基準の一つとして張維安先生がおっしゃられたように、言葉というのは非常に大きい要素だと思います。客家語をしゃべれるかどうかということは、われわれからみて「客家人かどうか」を同定化するときに非常に判断しやすい。だからわたしは、8項目にわたって、いろんな人々に個別に当たって、自分が「沖縄人かどうか」について聞いて見たことがあります。例えば「祖先も習慣も言葉も客家地域である、だから本国が客家地域であるブラジル人（国民）というのは客家人（族群）ですか」と聞くことと、同じようなことをブラジルの沖縄人に対して聞いたわけです。祖先も客家人で自分も客家語を話していて自分の習慣も客家文化であり、メンパーパン（台湾南部の客家麺）も食べている。そういう人は客家人なのか、それはもう当然、われわれも相手の人も「客家人」だと考え、そう答えるでしょう。

以上のような質問に「沖縄人だ」、「客家人だ」と答えうる人には、もうほとんど答えが用意されているんですね。これ実はどういう人かと言うと、移民1世に圧倒的に多いんです。最初に渡ってきた人に多い。では2世は、3世はというと、かならずしも単純なアイデンティティではなかった。いまどれくらいの「沖縄人」がブラジルに住んでいるかっていうと、36万人くらいいるんです。6世くらいまで存在する。だから移民した世代によって、アイデンティティが全然違うんです。従って今日の発表の中で、あまり出てこなかったのは、いつごろ移住した人なのか、どんな時代の相手なのかということですね。家系図に表すことのできる人間関係や世代の違いで、かれらのアイデンティティはまったく違うわけです。つまり最初に渡ってきた客家地域からの客家移民は、客家人意識を強く持ってるでしょうけども、3世～4世くらいになってくると親や祖先とは言葉も習慣も違ってくるということになるんで、だからわたしは世代別などいくつかの基準を違えて、このようなことを聞いたわけです。

客家語は話せないけれども、例えば「祖先も習慣も元々の客家地域から来ているブラジル国籍の人は客家人なのか」というような質問です。わたしはブラジルで祖先が沖縄出身の人たちに対して講演もしたし、「沖縄とはこういうところですよ」というような話もしたんですが、わたしの話を聴講したその人たちの大部分が、ブラジル語、いわゆるポルトガル語ですね、ポルトガル語しか話せない人たちでした。だから沖縄語は全然話せない。ところがかれらの「沖縄人意識」やアイデンティティは、かなりの多様性をもっていました。「沖縄語は話せないが、自分の祖先が沖縄なんだから、わたしは沖縄人だ」と答える人から、「わたしは沖縄語も沖縄文化も知らないが、ポルトガル語やブラジル文化に慣れているので、もはや沖縄人というより完全にブラジル人だ」という人までさまざまでした。

サンパウロに東洋人街がありまして（写真1）、その中に客家会館がありました。だから客家の人を調べようかなと思ったけれども、調査で「沖縄人」を調べていて、さらに「客家人」を調べたら体が持たないですね。いまもう歳だからね、客家人は調査しませんでした。沖縄移民研究をしているので、そこからの想像ですが、では祖先も言葉も客家

写真１　もともと日本人街だった現東洋人街。ブラジルサンパウロ市リベルダージ（2014年、筆者撮影）

地域だけれども、もはや自分の習慣はブラジル式でかつブラジル人になってしまっている人は客家人といえるのかというところで、アイデンティティは段々と分かれてくると思います。そうやってさらに言葉とか習慣とか出自意識とかの意識や生活を相手に聞きながら、彼らのアイデンティティを理解していったわけです。

今回の発表を見てみると、わたしは「新客家人」という概念は、これは新しい研究になり得るなと思っているわけです。最後にわたしはブラジルで沖縄出身者に対して、こういうことを聞いたんです。「祖先も習慣も客家地域とは全然違う。つまり沖縄や客家地域とは全然違うけれども、客家ファンの人間、客家を愛していて客家人になりたいというブラジル人は、沖縄人、客家人だろうか」という質問です。その答えは、たぶん一定の価値を持っているんじゃないか。このような客家ファンが、客家人になることを容認しうる時代がいまなのではないか。ということは、つまりわれわれは、古い時代に民族識別されたことを経験している。中国大陸では最近の出来事でしたね。民族識別でどれくらいの「民族」が、「ほんとうの歴史上同一の民族」とされただろうか？また「民族」は、そもそも古くから存在したんだろうか？「族群」も同様です。識別意図のある政策ではなかったか。

そういう「民族」や「族群」では理解できないような、また「民族」や「族群」を超えた時代がいまもうそこに来ているんじゃないか。それからわたしがカメルーン、中国、沖縄、ブラジルの４つの国で移民研究してきたときに、いちばん移民問題に大きい影響を与えていると考えたのは、今日みなさんが、ずいぶん話をして下さったわけですけれども、ときの政治経済状況なんですね。移民受け入れ国において、例えば「中国人排斥」

といったようなこともありましたし、アメリカは「日本人排斥」をしましたから、このような排斥はときの政府の政策や意図によります。当時ブラジルには移民排斥政策がなかったので、日本移民はいま160万人もいます。沖縄人が36万人もいるわけで、アメリカとの違いは明白です。世界各地の政治経済的な状況は、文化のあり方に、ものすごく大きな作用をしているわけです。その中でわたしの調査成果の中で、傾向としていちばん多かったのは、沖縄人に関しては「出自」の問題でした。自分は言葉も習慣も違うけども「沖縄出身」だという理由が、アイデンティティのかなり決め手になっていました。

さて客家人はどうだろう。「客家の地域から祖先が渡ってきたから自分は客家人なのだ」という意識。まあ、これは多分われわれでも想像がつくんですけれど、そういう「出自」が明白な人たちだったら、自分は客家人だと答える人が大部分だと思うんです。19世紀頃に「客家」という概念が他人から、つまりヨーロッパ人からもたらされた。この事実は、このたびの発表でも、また飯島典子先生の『近代客家社会の形成』（風響社、2007年）という本でも、そのようなことが主張されていて、19世紀の頃ですよね、「客家」という用語が歴史上登場する。それより以前に、なにか「客家」という概念が、いまと同様な意味で存在したのか、ちょっとここが微妙ですね。だから、「1854年に客家人がすでに移住している」という説は、これはちょっと歴史的な問題として考えなければならない。いずれにしても「出自」というのは、アイデンティティ上の非常に大きな問題である。しかも出自は、沖縄でも客家でも、通常父系出自による系譜として記録され語られてきたと思われている。

ところがわたしがブラジルで記録された系譜を見ると、沖縄人の系譜は、文化人類学でいうところの「cognatic stock」（共系ストック）という、いわば「双系出自」によって構成されているんです（写真２）。沖縄は本国では父系制社会なんですけれども、ブラジルにおいては双系制なんです。女性、母親の母親の母親の娘の娘も沖縄人です。つまりこのように母系でつながった人も、また父系でつながった人も、みな祖先が沖縄出身なら「沖縄人」と言える系図になっている。こんな系図は、沖縄本国ではあり得ないんです。だからみなさんの「出自」を問題にしたときに、父系出自だけだと考えてしまうと、客家人とは誰かについての認識間違いが起こりうる。とくに海外の客家は、ひょっとしたら母系制を採用しているかもしれない。父系制も母系制も、両方採用することを「双系制」（共系制）といいます。ブラジルでは、だから双系的に「沖縄人」は認められている。そこらへんが本国とは全く違います。

で、客家本国でわたしが客家人を調査したときに、とくに広東省の梅州や梅県で聞いたわけですが、客家人と血縁関係のない人びともまた「客家人」になっているんです。この事実は非常に重要です。つまり清朝期に頻繁に一族間の械闘（紛争）があって、お互いどうし、一族どうしが戦争をやっていたわけですが、そのときに全く血縁関係のない劉姓の一族が疑似血縁関係を創って、異姓の一族を敵にし、同姓の一族として族譜まで創って団結して戦ったという話を聞きました。だからほんとうの血縁関係はないわけ

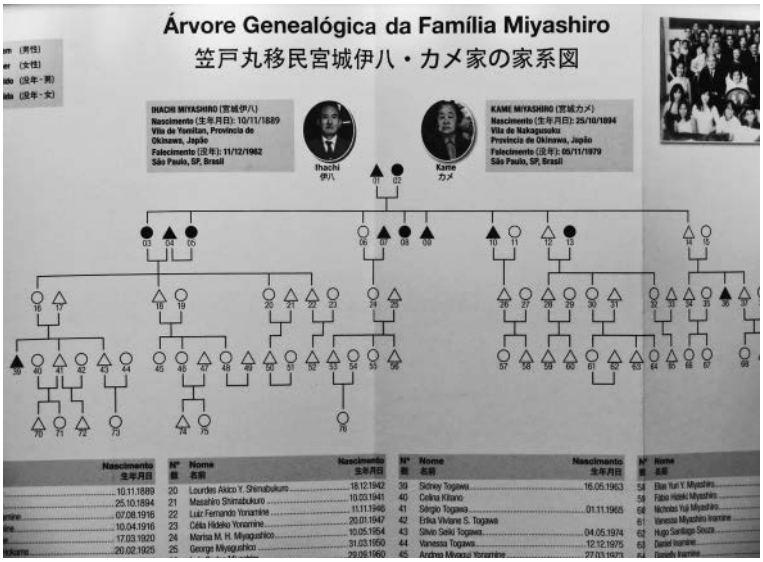

写真２　一組の移民初代を始祖として描かれた双系制一族のブラジル沖縄移民の家系図（ブラジル沖縄県人会編 2014）。

です。だけれどもいま、劉姓のすべてが、この地域では「客家人」になっているわけです。このように「出自」の問題は、実はわれわれは注意深く考えなければならないことなんです。もちろん客家人のアイデンティティを崩すつもりはありませんけれども、「客家社会は父系制だ」ということを過信してはいけないということです。全然そういう血縁に関係なく、客家という人たちは出自で繋がっているわけで、それがいまの実際の現地でも、そういう関係があるわけなんで、「新客家人」はだから「出自」の擬制か「双系制」という違った認識によるかで、とくに海外においては少なからず事例として出てくるありうる問題です。つまりかれらの認識では、一族とは父系制なのか母系制なのか、それとも双系制なのか、祖先だ出自だについて語ってもらうときに、必ず問題にしなければならない。これは文化人類学の重要な問題と言えるでしょう。

それから全く血縁関係のない人間関係を、歴史上有名な祖先とあたかも血縁関係があるかのように親族関係に擬制することを、わたしは「権威筋」という概念を使って表現し論文にしました。沖縄研究においてでしたが、そういうような概念を使って、客家のアイデンティティの学問的な裏付けをする必要があると思います。とくに「新客家人」はそうでしょう。

海外の客家人の移民社会は、本国のように父系制社会ではないかもしれない。また客家人の移民社会は、血縁関係を擬制化して「あたかも客家人だ」と主張しているかもしれない。というようにして考えてみると、「客家とは結局何か」というと、もし「客家社会」が海外にあるとすれば、それは本国とは違う「名称上の客家」かもしれず、文化内容は本国とはまったく違うじゃないんじゃないか、ということが考えられます。

つまり「名称上の客家」は、本国も含めて各地の文化や内容は異なっても、各地で「客家だ」、「客家文化だ」、「客家料理だ」ということを是認してみることも、重要なわれわれの認識だと思うわけです。「新客家人」も「客家人」なんです。わたしはこういう名称やイメージなどが同じで、内容や文化の異なる現象に対して「仮構」という概念を用いてきました。河合洋尚先生がこのたび使っておられたわけですけれども。「仮構」という概念を、そのまま英語でfictionと訳してよいか、中国語の概念としても用いうるか、あるいはM. ハイデガーが言っているような「project」（投企）という概念として使っていいか分からないのですが、いずれにしても「客家」という概念が、B.アンダーソンが言ったようなイメージとしてあって、内容の問題は後にくっついてくる。イメージとか計画とか政策とかモデルとかいうようなものがまず先にあって、その後に、それに合わせるべく運動や実体化を起こすような活動、例えば「新客家運動」とか、あるいは「客家語を守ろう」と言って学校を作ったりする活動がある。学校それ自体も「仮構」ですよね。学校建設の前に学校教育があるわけではない。学校建設の後に「学校」内容が実体化するんです。だから客家の学校が出来立てのところに、客家文化が完成しているはずがない。だんだんと客家文化が創られ伝承されて、どんどん客家人が出来上がってくるように、本来、「客家」そのものは仮構なのではないか。

仮構という概念は、決して悪い概念じゃありません。何かいろいろなイメージやモデルや政策や経済的な理由や資源として考える発想などが先行することで、まず名称やイメージが「客家」として存在するようになり、それが後にくっついて恐ろしいほど多様な文化が「客家文化」として出来たのではないか。だからこそ1808年あたりに、ヨーロッパ人が「客家Kecha、Hakka」という概念を使って、まとまりを持った存在として描き、それを根拠として現地人や学者が実体として受け取った時代が19世紀だったんじゃないか。つまりそれは要するに仮構として「客家」という概念が出来上がったあとに、客家人が自身のアイデンティティのよりどころとして受け止めて、「客家」という概念を具体化し四方八方に拡大し創造していったのではないか。まさに、時代時代の「新客家人」を現地人みずからが創っていったんじゃないか。そこらへんがわたしの結論というか、これからの研究ということでやってみたいと思っている内容です。そうすると、わたしも客家人になれるんじゃないかなと、一縷の望みがあるわけです。

参照文献

〈日文文献〉
ブラジル沖縄県人会編
2014　『笠戸丸沖縄県人移民325名、名簿及び簡単な足跡』サンパウロ：ブラジル沖縄県人会。